

大学進学者における学習経験と学習性向

—ユニバーサル・アクセスに向けた
「新しい時代の教養教育」の文化的条件—

大前 敦巳

1. 問題設定

大学・短大の進学率が同年齢人口のほぼ半数に達し、マーチン・トロウ（1976）のいう万人型の教育機会（ユニバーサル・アクセス）が現実のものになりつつある現在、多様な経路を想定した進学条件の整備をすることが重要な課題となっている。生涯学習体系への移行に伴い、年齢や国籍をはじめとする社会的属性に制約されない学習者の増加が見込まれている。高等教育への進学に限っても、入学試験による選抜が人生の重大岐路と認識されるほど過熱した受験競争の時代が過ぎ、個々人のニーズや状況に合わせて志望校を選ぶ傾向が強まっている。そのような構造的変化のなかで高学歴社会を迎えるにあたり、単に学歴が社会的シグナルとなるのではなく、その背後にある様々な「学習歴」を考慮に入れた進学やキャリアのあり方が重要な意味を帯びてくると考えられる。そこには学校卒業後の成人期におけるリカレント学習のみならず、初等中等教育段階からの連続性に注目することが求められよう。

2002年2月の中央教育審議会答申「新しい時代における教養教育の在り方について」においては、個人の人格形成だけでなく目に見えない社会の基盤として、①幼・少年期、②青年期、③成人期の3段階にわたって求められるトータルな教養の課題を提示している。主として高等教育の問題として論じられてきた教養教育も、「幼児期からの家庭教育、初等中等教育も含めた学校の教育活動全体、地域での様々な活動、社会生活における様々な体験や学習を通じて、いかに教養を身に付けていくかを考える必要がある」と述べられる。旧制高校を母体とする教養主義の喪失過程を描き出した竹内（2003）は、平均人的な大衆文化への同化・適応が正統化される現代の状況に対し、教師や友人などの「人的媒体」を介した教養の自省・超越機能を再喚起して、新たな出発点を探るしめくくりをしている。

大前(2002, 2003)は、高等教育進学者(主に文科系学生)における過去の学習経験を調査することにより、その同質的な同化がもたらされる側面と、多様化が進行している側面を明らかにすることを試みた。その結果、調査対象となったすべての大学・短大において、同質的なメインストリームを構成する進学ルートと学習経験が見られることを確認した。つまり、国籍、年齢層、全日制普通高校卒の面ではほぼ同一であり、家庭教育の経験が相対的に乏しく、小学生時に習いごとに通い、中学生時以降に塾や予備校に通うという主要な学習経験のパターンがあることを明らかにした。しかし、その背後には、主に周辺層の学生において、各大学・短大の社会的文脈に固有の多様性を包含していることを指摘した。

本稿は、そのような学習経験の同質性／多様性という関係性に着目しながら、初等中等教育時代の経験が、大学生にどのような学習性向をもたらしめているのかについて、同様のデータを用いて分析する。その際、フランスのルーアン大学とパリ第8大学でも実施した調査結果を対照させることによって、日本の大学生に現れる学習経験と学習性向の特徴を明確化することを試みる。これらの間には、いかなる多様な関連性が見られるのか、そのつながりを前提にいかなる「新しい時代の教養教育」を考えることができるのか、そしてそれが可能になる条件はどのようなものであるのか、そのような問いを本稿において立ててみることにしたい。

2. 分析視角と方法

本稿で取り上げる調査データは、2002年5～7月にかけて、関西と北陸の7大学・短大の1・2年生を対象に実施した質問紙調査によるものである。そのうち本稿の分析に用いたのは、次の5大学の結果である。

- ① 最も競争的な関西の私立大学(以下「関西私立S」と表記：n = 194)
- ② 関西の国公立大学(「関西国公立」：n = 121)
- ③ 関西の私立大学(「関西私立」：n = 174)
- ④ 北陸の国公立大学(「北陸国公立」：n = 263)
- ⑤ 北陸の私立大学(「北陸私立」：n = 151)⁽¹⁾

学部に関しては、文学・人文社会系に加えて、総合科学系、芸術文化系、教育系(教員養成系を除く)も含めた広義の「文科系」に範囲を限定している。加えて、⑥ルーアン大学とパリ第8大学のデータは、2002年2～3月に、いずれも文学・人間科学部を対象とする授業を通じて収集したものであり、今回の分析では両大学の1・2年生サンプルを合算したものをを用いている。

分析を行うにあたっては、次のような単純なモデルを想定した。つまり、性別や出身階層などの学生の社会的属性が、初等中等教育時代の家庭教育や塾・習いごとなどの学習経験に影響をもち、それが学習に対する顕在・潜在の両面を含む意識や態度の性向

(disposition)あるいは先有傾向(predisposition)に結びついていると仮定したモデルである。

学生の社会的属性 → 過去の学習経験 → 学習性向

社会的属性のうち出身階層については、質問紙調査では父親と母親の職業と学歴を質問している。なかでも母親の学歴は、子どもの教育に大きく関与していると推察できるのに加え、①中学以前、②高校、③専門学校・短大、④大学・大学院というカテゴリーに幅広く分布しているため、これを量的変数とみなして分析に用いることにした⁽²⁾。

過去の学習経験に関しては、小学校低学年、小学校高学年、中学生、高校生のそれぞれの時期に受けた教育の経験を質問している。ここでは、①「家族から日常的に勉強を教えてもらう」家庭教育経験、②塾・予備校・家庭教師の経験、③文化活動（音楽などの習いごと）とスポーツを合わせた経験について、受けた時期の合計数（0～4）を、学習経験頻度を表す変数として使用する。

学習性向を表す変数として、「一般に学校でよい成績をとるためには、次のどの要因が重要であると考えますか」と質問した項目を取り上げる。分析においては、①一般教養、②専門的知識、③論理的思考、④文章をうまく書くこと、⑤学習計画を立てること、⑥規則的な自宅学習、⑦授業中にノートをとること、⑧モチベーション（動機づけ）、⑨努力をすること、⑩生まれつきの能力、のそれぞれについて、「とても重要である」＝4、「少し重要である」＝3、「あまり重要でない」＝2、「全く重要でない」＝1と得点化した変数を使用する。これらの得点の相互関係に着目して、各大学の学生における学習性向の特徴を明らかにすることを試みる。

3. 初等中等教育時代の学習経験

まず、各大学における学習経験の頻度を、平均値と標準偏差によって概観しておくことにしたい（表1）。家庭教育経験については、関西と北陸の5大学がいずれも平均1ポイント前後であるのに対して、ルーアン・パリ第8大学では1.75ポイントと高くなっており、

表1 学習経験頻度についての平均値と標準偏差（大学別）

	家庭教育		塾・家庭教師		習いごと	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
関西私立S	1.01	1.12	1.68	1.02	2.58	1.23
関西国公立	0.97	1.03	1.91	1.06	2.55	1.15
関西私立	1.02	1.16	1.76	1.03	2.61	1.19
北陸国公立	0.95	1.13	1.19	1.04	2.63	1.17
北陸私立	0.93	1.15	1.16	1.08	2.25	1.27
ルーアン・パリ第8	1.75	1.39	0.39	0.65	2.14	1.52

表2 家庭教育経験頻度についての平均値 (大学別・性別・母親学歴別)

	性別		母親学歴			
	男性	女性	中等以下	専門短大	大学	
関西私立S	0.88	1.09	0.83	0.77	1.51	**
関西国公立	0.85	1.06	0.96	0.97	1.07	
関西私立	0.87	1.13	1.01	1.13	1.29	
北陸国公立	0.94	0.94	0.78	0.96	1.33	*
北陸私立	0.90	0.94	0.73	1.12	1.58	*
ルーアン・パリ第8	1.71	1.81	1.73	2.05	2.00	

*p <0.05 ** p <0.01

日本の大学生における家庭教育経験の比重の小ささが顕著である。反対に、塾・予備校・家庭教師をみると、日本の大学で1ポイント以上の平均値になっているのに対し、ルーアン・パリ第8大学では0.39ポイントにすぎず、日本の大学生が学校外教育に大きく依存した学習経験を有していることがわかる。その程度には地域差があり、特に関西の大学でポイントが高く、北陸では3割程度の学生が塾通いの経験がないと答えている。文化活動とスポーツの習いごとについては、日本・フランスともに2ポイント以上の値になっているが、ルーアン・パリ第8大学が2.14ポイントで最も低く、標準偏差が1.52と最も高くなっている。

次に、学生の社会的属性別にみた学習経験頻度の違いを確認しておくことにしたい。表2は、各大学における性別、母親学歴別の家庭教育経験の平均値を記したものである。参考までに、性別には独立2群のt検定、母親学歴別には一元配置分散分析の結果も合わせて記載している。性別については、女性のほうが平均値が高い傾向がみられるが、いずれの大学とも大きな違いが見られるわけではない。

他方、母親学歴別にみると、学歴が高くなるほど平均値も高くなる傾向があり、特に関西私立Sと北陸の国公立・私立大学で顕著である。この傾向は、父親の職業や学歴からみても同様であり、学歴が高く、専門職の家庭であるほど家庭教育経験が豊富になっている（反対に労務職や自営業で平均値が低い）。その意味では、家庭教育経験頻度の差は、家庭から相続される「文化資本」の差を表していると考えてもよいだろう。ただし、全体の平均値が高かったルーアン・パリ第8大学においては、日本のケースほど社会的属性による違いは見られなかった。

塾・予備校・家庭教師の経験については、関西と北陸の大学においては、全体の平均値が高いこともあって家庭教育ほど社会的属性による差は見出されなかった（フランスのケースでは社会的属性による違いが見られ、高学歴で自営業・専門職の家庭で塾通いを多くさせる傾向がみられる）。

文化活動・スポーツなどの習いごとに関しては、日本の大学では性別による差が顕著に

表3 習いごと経験頻度についての平均値（大学別・性別・母親学歴別）

	性別			母親学歴			
	男性	女性		中等以下	専門短大	大学	
関西私立S	2.07	2.90	**	2.26	2.61	2.94	**
関西国公立	2.18	2.80	**	2.49	2.73	2.55	
関西私立	2.37	2.78	*	2.60	2.73	2.78	
北陸国公立	2.20	2.82	**	2.49	2.56	2.98	*
北陸私立	2.07	2.38		2.21	2.42	2.47	
ルーアン・パリ第8	2.25	2.15		1.96	2.62	3.05	**

*p <0.05 ** p <0.01

表れている（表3）。母親学歴別には、関西私立Sと北陸国公立において、学歴が高くなるほど習いごとも多く通わせる傾向がみられる。しかし、母親の学歴による違いが最も表れているのは、ルーアン・パリ第8大学においてである。フランスのケースでは、社会的属性にかかわらず家庭教育経験が広く一般的に行われている一方で、出身階層の高い学生になると、さらに習いごと（主に休日やバカンス期の学外クラブ参加）の経験が豊富になってくるといえる。

それに対して、日本の大学生においては、初等中等教育時代に塾や習いごとに通わせることが、同質的なメインルートを構成して多数派を占めているなかで（大前，2003），家庭教育経験の違いに社会的出自の影響が反映される結果となっている。他方、性別（ジェンダー）の影響に関しては、家庭教育経験において違いは見られなかったものの、習いごとが女性によって多く担われているという特徴が認められる。このような日本の（関西と北陸の文科系）大学生に特有の学習経験は、何らかの学習性向の特徴にも結びつく形で構造化されているのだろうか。以下では、その問題に焦点を当てて分析を続けていきたい。

4. 学習性向の分析

日本とフランスの教育は、きわめて単純化された図式であるが、学歴社会と資格社会という対比で語られることが多い。前者は、かつて「試験地獄」とまで言われた入学試験の関門があり、「いい学校→いい会社→いい人生」という学歴主義的な価値観の下で、受験競争が繰り広げられる。後者は、高校（リセ）の修了時にバカロレアと呼ばれる国家試験を受け、その資格を取得すれば、原則として誰でも大学に進学することができる。ただし、入学すれば容易に卒業できる「トコロテン方式」では決してなく、大学だけでなく中等教育以前においても、授業についていけない者の留年や進路変更が後を絶たない。実質的には授業期間中にドロップアウトを伴う形で選抜が行われており、これが社会問題にもなっている（特に社会的不平等との関わりにおいて）。

表4 学校でよい成績をとるための要因（学校別）

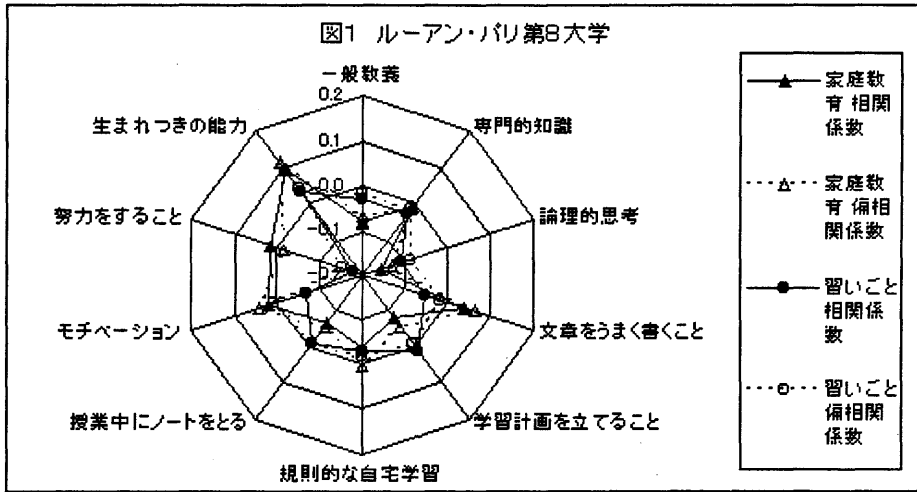
	関西私立S	関西国公立	関西私立	北陸国公立	北陸私立	ルーアン・パリ第8
一般教養	3.24	3.09	3.60	3.31	3.47	3.66
専門的知識	3.37	3.49	3.46	3.49	3.42	3.34
論理的思考	3.51	3.74	3.15	3.62	3.01	3.30
文章をうまく書くこと	3.64	3.54	3.41	3.50	3.39	3.42
学習計画を立てること	3.10	2.97	3.19	2.95	3.01	3.06
規則的な自宅学習	2.99	2.98	3.29	3.18	3.15	3.19
授業中にノートをとる	3.17	3.19	3.37	3.08	3.44	3.64
モチベーション	3.36	3.34	3.05	3.35	2.92	3.74
努力をすること	3.58	3.53	3.65	3.60	3.63	3.23
生まれつきの能力	2.65	2.69	2.66	2.66	2.56	2.50

※とても重要である=4, 少し重要である=3, あまり重要でない=2, 全く重要でない=1, とした場合の平均値

そのような教育と社会の文脈のなかで、「学校でよい成績をとるための要因」について質問した結果を示したのが表4である。まず、フランスのケースからみると、日本の大学生に比べて一般教養（culture générale）を重視する傾向が強く、さらに授業中にノートをとること（prendre des notes de cours）、モチベーション（être motivé）の平均値が高い（表の網掛け部分）。このことから、ルーアン・パリ第8大学の学生においては、授業をはじめとするコミュニケーションの話題に通じるための一般教養と、自分が学ぼうとする授業内容に対する動機づけを有した状態で、教師の話すことをよく理解してノートに取っていくことが、学業成績面の（すなわち授業にしっかりついていくための）要因であると考えられている。

続いて、関西と北陸の大学生に目を移してみると、すべての大学において努力をすることが重要であると答える傾向が高いことが第1に挙げられる。第2に、関西私立Sでは文章をうまく書くことが重視されているのに対して、関西と北陸の国公立大学では論理的思考の平均値が相対的に高い。第3に、関西私立・北陸国公立・北陸私立では規則的な自宅学習を重視する傾向が強い（ルーアン・パリ第8大学においても同様）。日本においては、努力の重要性が全体として共有されているなかで、関西私立Sでは文科系らしく文章力を重視するが、国公立大学では（入試の影響からか）論理性のほうが優位に立っており、それ以外の大学では規則正しく勉強する習慣をもつことが重視されているわけで、これらの結果から、学歴社会を反映した「禁欲的頑張る主義」（大村，1997，pp.59-80.）の側面が表れているといえるだろう。

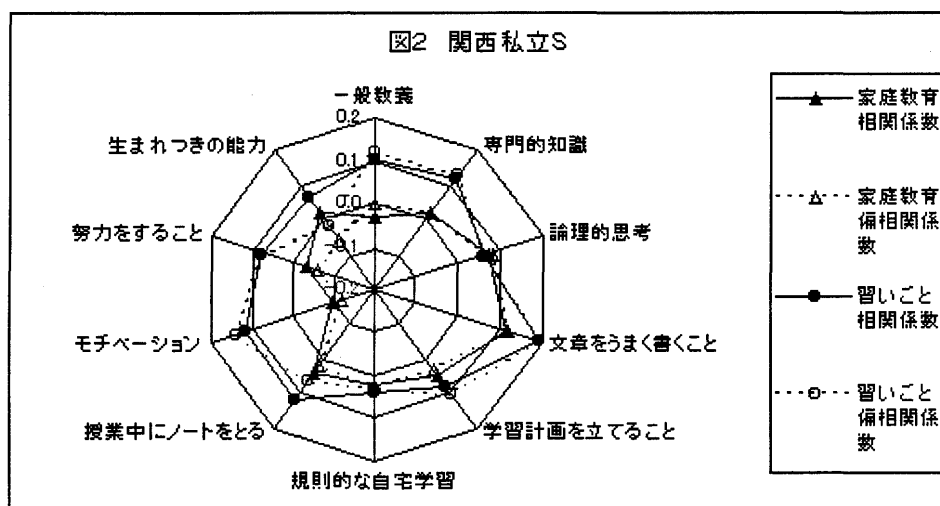
これらの「学校でよい成績をとるための要因」は、学生の社会的属性や過去の学習経験とどのように結びついているのだろうか。以下の分析では、それぞれの学習性向に関する項目と、家庭教育経験および習いごと経験との相関係数を計算し、さらに母親学歴をコン



トロール変数とした偏相関係数を重ね合わせることで、本稿で設定したモデルの具体的な関係の様相を検討する。

図1は、ルーアン・パリ第8大学の結果をレーダーチャートに表したものである。相関係数の目盛りは、学習性向に関する各項目を頂点とする10角形の最も内側（中心）が-0.2（負の相関）、頂点と中心の中央が0（無相関）、最も外側の頂点部分が0.2（正の相関）となっている⁽³⁾。したがって、学習経験と学習性向の間に正の相関が見られるほど、外側に大きく広がる点と線が描かれ、無相関であると真ん中部分に分布し、負の相関になるほど中心に向けて小さく集まるグラフの形になる。ルーアン・パリ第8大学においては、全体的に無相関に近い結果であることが多い。つまり、学生の社会的属性や学習経験にかかわらず、表4の平均値をもつ分布に近いものが見られるということである。しかし、より詳細に結果をみると、家庭教育経験の頻度が多いほど、生まれつきの能力が重要であると考え、反対に論理的思考や一般教養は重要でないと考える傾向が見られる。習いごと経験との相関については、論理的思考に加えて努力をすることと負の関係になっている。偏相関係数との差が大きいことから、家庭教育や習いごとの経験が多い者ほど、論理的思考や後天的要因を重視しない傾向があり、あえて解釈を与えるとすれば、フランスのディレタントな文学部学生に特有とされる「天賦の才」のイデオロギー（ブルデュー&パスロン、1964 = 1997, p.127）が表れているといえるかもしれない。

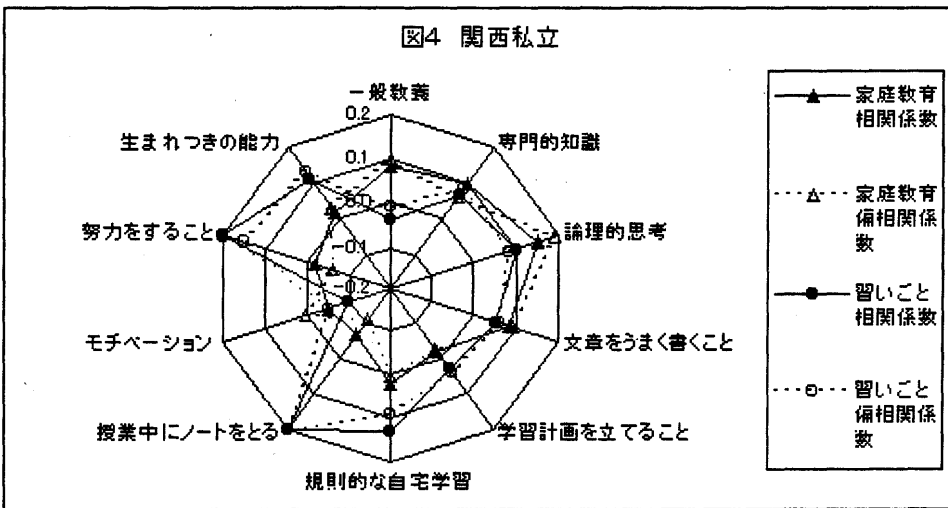
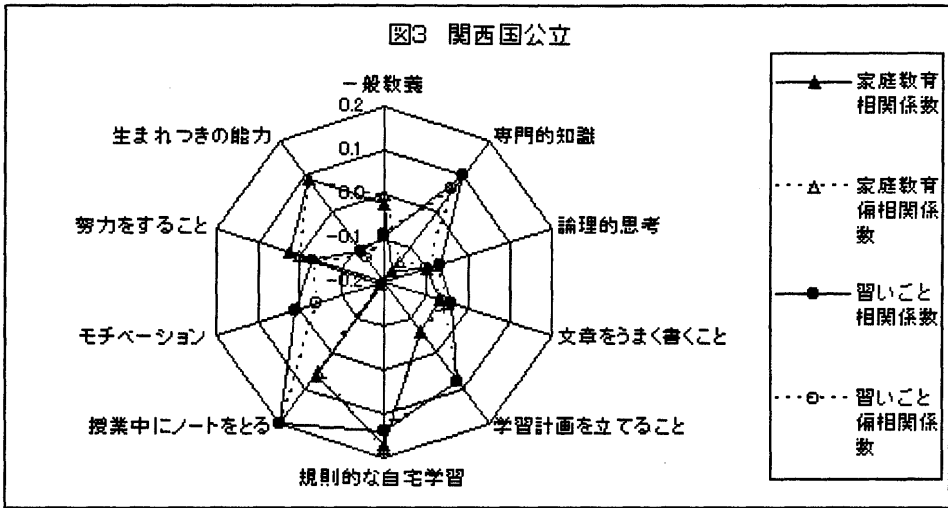
フランスのケースに対して、関西と北陸の大学生の結果を見てみることにしよう。図2は、最も競争的な関西の私立大学の結果であるが、ルーアン・パリ第8大学の結果よりも外側に大きく広がる形の分布をしていることがわかる。つまり、多くの項目で、学習経験と学習性向の間には正の相関が見られるということを表している。家庭教育経験との相関をみると、文章をうまく書くこととは正の関係が、モチベーションとは負の関係が認めら



れる。習いごと経験においても、文章をうまく書くこととは強い正の相関があり、さらにはモチベーション、努力をすること、一般教養、専門的知識などとも正の相関が見られる。ただし、授業中にノートをとることと生まれつきの能力については、偏相関係数が小さく表れており、習いごと経験との結びつきよりも母親学歴の影響が及んでいる可能性がある。このことから関西私立Sにおいては、家庭教育や習いごとの経験が豊富であるほど、この大学に特有の文章力を重視する傾向が高まり、習いごと経験との関わりにおいては、努力やモチベーションなどの後天的要因を重視する傾向とも結びついている。

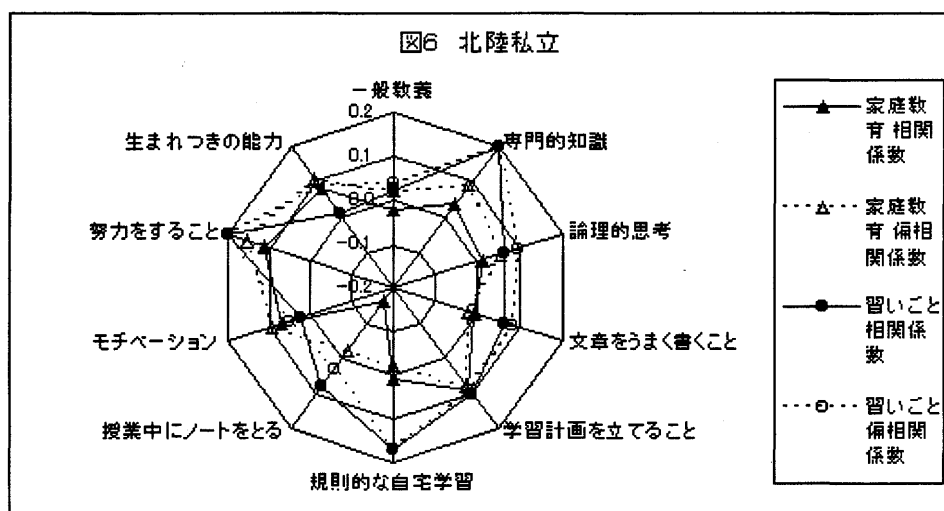
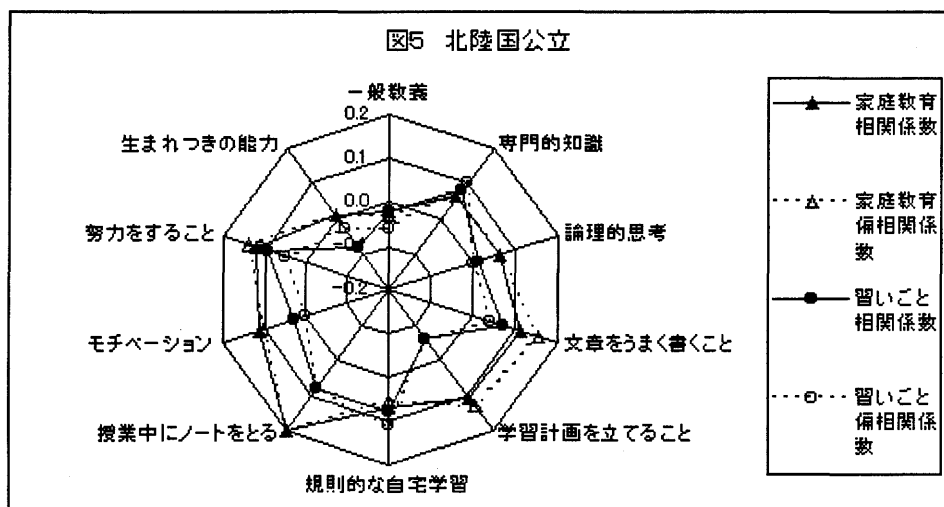
続いて、図3は関西国公立の結果を表したものである。項目によって相関の程度が大きく異なっているところに特徴がある。家庭教育経験は、規則的な自宅学習と生まれつきの能力を重視することと正の相関があるが、モチベーション、専門的知識、論理的思考、文章をうまく書くことなどとは負の相関になっている。習いごと経験との相関については、規則的な自宅学習のほかに授業中にノートをとること、学習計画を立てること、専門的知識と正の相関があり、生まれつきの能力、一般教養、論理的思考とは負の相関が表れている。偏相関係数との隔たりは大きくなく、家庭教育や習いごとの経験が多いほど、着実に勉強することを重視する傾向が高まるように見受けられる一方で、国公立大学に特有であった論理的思考は重視されなくなっている。とはいえ、文章力や一般教養などの文科系に求められるような学習性向が高まるわけでもなく、むしろ受験勉強に関わるような「学力」に結びついた価値観が表れているのではないかと推察する。

関西私立の結果をみると、分布の形状がより外側に大きく広がっており、多くの項目で学習経験との正の相関があることをうかがわせる（図4）。家庭教育経験は、論理的思考、一般教養、専門的知識、文章をうまく書くことと正の相関があり、授業中にノートをとることとは負の相関になっている。習いごと経験に対しては、努力をすることと授業中にノ



トをとることと比較的強い正の相関が表れており、生まれつきの能力、規則的な自宅学習、論理的思考、専門的知識とも正の相関がある。負の相関になっているのは、モチベーションである。このことから関西私立においては、学習経験が後天的な学業成績要因に大きく結びついており、しかも論理的思考や専門的知識といった職業生活につながる学習性向が高まることが興味深い。

北陸国公立においても、学習経験が後天的な学業成績要因に結びついており（図5）。家庭教育経験は、授業中にノートをとること、努力をすること、モチベーション、学習計画を立てること、文章をうまく書くことと正の相関が見られる。習いごと経験においても、授業中にノートをとること、努力をすることと正の相関があり、加えて専門的知識とも正



の相関がある一方で、学習計画を立てること、生まれつきの能力とは負の相関となっている。ただ、関西私立に見られたように、職業生活に結びつくような実学的な学習性向が目立って表れているわけではない。

北陸私立の結果をみると、よりいっそう学習性向との正の相関が顕著な結果になっている（図6）。家庭教育経験は、努力をすること、モチベーション、生まれつきの能力、学習計画を立てることと正の相関があり、偏相関係数においては専門的知識も正の相関を示している（また、授業中にノートをとることの相関係数は負の値を示しているが、偏相関係数は無相関に近いので、母親学歴の影響で負の相関になっていたものと推測される）。習いごとと経験との関わりになると、負の相関を示しているものはない。努力をすることと

専門的知識が2.0以上の比較的強い相関を示しており、規則的な自宅学習、学習計画を立てること、文章をうまく書くこと、論理的思考とも正の相関がみられる。とりわけ北陸私立における習いごと経験は、努力重視に代表される後天的な学習性向と、専門性・文章力・論理性といった職業生活に結びつく現実的な学習性向をもたらしている。

以上の分析結果から、関西と北陸の大学生における学習性向は、フランスの場合に比べて、家庭教育や習いごとの経験に依存する程度が大きいといえる。特に、努力重視をはじめとする後天的な学業成績要因は、そうした学習経験によって培われているのであり、実際、そう信じられるようになるからこそ、塾や習いごとに頻繁に通うことがごく自然に認識されるのだろう。偏相関係数との隔たりが大きい項目もあまり見られなかったことから、母親学歴に代表される社会的属性以上に、初等中等教育時代の学習経験が、大学生の学習性向に大きな影響を及ぼしていると考えられる。

また、同じ学習経験を積み重ねても、大学によって様々に異なる学習性向が形成されていることも明らかになった。関西私立Sでは文章力の重要性が、国公立大学では着実な勉強を通じた「学力」重要性が、学習経験の豊富な学生によって認識されている。私立大学においては、たとえ文科系であっても、専門的知識や論理的思考といった職業生活につながる実学的な学業成功観をもった志向性がみられる。このように初等中等教育だけでなく、大学によっても異なるタイプの学習性向が散見されたことから、その可塑的な側面が浮き彫りになったといえよう。

5. 考 察

学業成績要因という観点からであるが、関西と北陸の文科系学生が身につけている学習性向が、過去の学習経験や所属する大学によって形づくられる傾向が大きいという結果を勘案すれば、幼少期から成人にいたるトータルな自己形成面での学習が重要な意味を帯びてくると考えられる。塾や習いごとに多く通うという同質的な学習経験が共有され、しかもそれが努力をするという後天的な要因の重視に結びついていることからしても、大多数の学生にとっては、教育を通じて自己をつくり上げていくことに対する信頼が依然強く堅持されているといえるだろう。「新しい時代の教養教育」を構想するにあたって、当然そういう人々の教育に対する信頼を基盤に据えることが出発の大前提でなければならない。

問題は、周知のように近代日本における教育意識が、「立身出世主義」（竹内，1997）を原型とする、学歴主義秩序に根ざした受験体制のなかに組み込まれてきた経緯があることである。今日のように大学進学が常態化している状況においては、大学間格差によって学生の意識や態度の違いが見られることが指摘される。武内（2003a，pp.171-172）は、大学によって異なる特性を備えた学生が集まってくることに関わる学生文化の規定要因として、次の4つを挙げている。

- ① 大学の特性（地理的環境・歴史的伝統・規模・施設・学部構成・教授団の構成・カリキュラム・授業・学生指導体制など）
 - ② 入学してくる学生の特性・同じ大学に通う友人から受ける影響
 - ③ 学生の進路（就職先）
 - ④ 大学の入学偏差値（ランク）・世間の大学に対する評判・大学イメージ（チャーター）
- これらの諸要因の組合わせによって、それぞれの大学に特有の学生文化やパーソナリティが知らず知らずに醸成されるという。

本稿の分析において見られた大学間の学習性向の違いも、競争的（selective）であるか否か、国公立と私立、大都市と地方といった要因によって作り出されている面があることは、否定できないかもしれない。しかし、冒頭で述べたようにユニバーサル・アクセスの時代を迎えるにあたって、単にどの大学に入学するだけでなく、個々人のニーズや状況に合わせた学習条件を整備し、学習意識を醸成していくことが求められよう。別のところで武内（2003b）は、15大学と4短大の在学生、および5大学と2短大の卒業生を対象とするアンケート調査の結果から、学生たちは、大学を「学問の場」としてだけでなく、「サークル、アルバイト、交友、旅行などさまざまな体験をする場」と考えていることを指摘している。そして、最近の学生における傾向として、「就職難時代の学生」と「個人化する学生」を挙げ、「大学のキャンパスライフの豊かさは、学生が選べる選択肢がどれだけ多様に用意されているにかかっている」（p.137）と述べている。

その意味において、大学界の構造的な変化と矛盾（アレゼール日本編，2003）に対峙できるだけの自己を確立するべく、「新しい時代の教養教育」の充実を図っていくことが1つの重要な鍵になると筆者は考える。そのためには、審議会答申文書のなかでも、「特に重視すべき観点」の1つに掲げられている「異文化との接触」を看過するわけにゆかない。ここでいう「異文化」とは、「単に異なる国や地域の文化という意味だけでなく、異なる性、世代、国籍、言語、宗教、価値観、生き方、習慣などあらゆる『自分とは異なるもの』のこと」を指す。これらの様々な「異文化」を相互に尊重できる力を主体的・自発的に身につけることなくして、教育に信頼を置く同質的な学習経験を共有しながら、そこにとどまらず、ますます多様化する学習のあり方を受け入れていくことはできないだろう。

【註】

- （1）この調査では、ほかに関西の最も競争的な国公立大学と関西の私立短期大学も対象にしているが、前者は文科系学生の分析サンプル数が十分得られなかったため、後者は紙幅の関係上議論を大学生に限定したために、今回の分析から除外することにした。これら2つの大学・短大については、稿を改めて詳しく検討することにした。
- （2）フランスのケースでは、主に外国出身の学生で母親の学歴が「なし」と答えた場合も少なからずあり、①中学以前にコードしている。それ以外のカテゴリーは、②中等教育職業技術資格、③バカロレアと中等後職業技術資格、④高等教育資格に区分したものをを用いている。
- （3）0.2（また-0.2）をこえる係数については、図示の見やすさの関係上、0.2（または-0.2）のどこ

ろにプロットをしている。

《参考文献》

- アレゼール日本編, 2003『大学界改造要綱』藤原書店.
- ブルデュー, P., パスロン, J. C., 1964 = 1997, 石井洋二郎監訳『遺産相続者たち—学生と文化—』藤原書店.
- 中央教育審議会, 2002「新しい時代における教養教育の在り方について (答申)」平成 14 年 2 月 21 日, 文部科学省ホームページ (<http://www.mext.go.jp>).
- 大前敦巳, 2002「上越教育大学生の学習経験と学生生活—日仏比較に向けた質問紙調査の問題点と課題—」『上越教育大学研究紀要』第 22 巻第 1 号, pp.201-215.
- 大前敦巳, 2003「高等教育進学者における学習経験の同質性と多様性—関西と北陸の文科系学生を対象とする調査結果の探索的分析—」『上越教育大学研究紀要』第 23 巻第 1 号, pp.61-74.
- 大村英昭, 1997『日本人の心の習慣—鎮めの文化論—』NHK ライブラリー.
- 武内清, 2003a「学生文化の諸相」武内清編『キャンパスライフの今』玉川大学出版部, pp.167-181.
- 武内清, 2003b「学生と大学改革」有本章・山本眞一編『大学改革の現在』東信堂, pp.119-138.
- 竹内洋, 1997『立身出世主義—近代日本のロマンと欲望—』NHK ライブラリー.
- 竹内洋, 2003『教養主義の没落—変わりゆくエリート学生文化—』中公新書.
- トロウ, M., 1976, 天野郁夫・喜多村和之訳『高学歴社会の大学』東京大学出版会.